

言  
案  
書

1970.

昭和45年度 農学部学生委員会

共同提案者  
曾我 隆幸  
提案責任者

- 渡辺 美紀子
- 新良 成生
- 大田 政郎
- 高木 譲作
- 長谷川 靖明
- 小沼 正昭
- 二木 宏考
- 池田 秀久
- 前川 児郎
- 中川 碩一郎
- 金沢 刚
- 有吉 裕子
- 植佐 寛人
- 八木 威夫

○小島 信雄  
○左林 真

名  
ト  
ナ  
ン  
沖縄戦争勝利/  
入管体制粉碎/  
口ソクアウト体制粉碎/  
農学部の庶民主義的再編粉碎/  
農学部の庶民主義的再編粉碎/  
三里塙戦争勝利/  
明大生協の拠点化と地域生協進出を勝ち取れ/  
鶴川バス斗争を支援しよう/

情勢の基調と総括

十一

本日の筋は、御用達の「煙草」(タバコ)の  
の通販規制。

マの医師は、歴史的症候を以て、その病状を説明せん。

①  
70年代日帝と沖縄

メニアマークの仕事は、この間の精神的成長が最も大きい。娘の誕生日を祝う会で、彼女は「お母さん、お父さん、おじいちゃん、おばあちゃん、お兄さん、お姉さん、お嬢さん、お嬢さん、お嬢さん」と、おじいちゃんの名前を三回も呼んでいた。おじいちゃんは喜んで抱き合った。おじいちゃんは、娘の誕生日を祝う会で、彼女は「お母さん、お父さん、おじいちゃん、おばあちゃん、お兄さん、お姉さん、お嬢さん、お嬢さん、お嬢さん」と、おじいちゃんの名前を三回も呼んでいた。おじいちゃんは喜んで抱き合った。

生産率の成長の初期段階 語組結  
の指揮体制を確立し、その内情防  
ぼ地区・住民など連帯して90年代の戦  
列の一翼を打ち固めることとなるのであ  
る。

六九年秋期（セトヤニナム）六月安石信勅延長までの政局過程に於ける一連の我々の助走は、一ツの政治委員会の辯繩田政参加を媒介としてのソビエト侵略の一歩を確に計ってしまったといふべき、社会過程のものを千金的には意味しない。その二つが七十年日帝の動向（アキヒタケイ）体制の確立に向て必至の課題と見つてしるることは言うまで、さういふところが、日本政府は

（一）一月韓國朴大統領三選  
支持。②毎年四月に予定される出入  
口管理法案提出である。先に毛言  
つによつて、扣締因政参加一七二一年  
反覆に向けた日本アルシヨアジーと  
本土革新政党による戦同扣締の解体  
一本土一体化が重頭のところを進行し  
てゐる。

西原仙信を頂ける教育の本土化・総合化教育委員会の任命制の均等の本土化列化「本土の内閣に属する方針は、(当選しても内閣で使い)が生えぬ倉石義宣の總務行政の一元化、自衛隊の独立としてあり最たる事実の上、そういう行政権力の強化の行はる」といきつて、辻編入民の本願寺の争うエヌルヤしを想神し争ひして、(どう一どなのだ。以下若干くゆしく見て行こう。

の其々、既にバクロして「く」と言つ  
ように、戦前の政局裏話の分解を云  
ふに形成してゐる。かつ又糾評一元  
団に主要に組織化された「」に参加  
者は、六十（）、大正の後備投票運動  
高復興成長を以降の合理化の進  
行の中、旧共の革新政党「組織協力  
者の組織を突破した反戦青年を生  
んでいるし、合理化し切れない末端  
部内に大量的臨時労働者の形成は大  
量の雇用化現象を生んでいる。二の  
よう巨情化で組織をめぐる日本の  
動向は全アジア財程に入出、政和  
軍事、政治の隔離主義的統治の進歩  
歩んでいたのだ。日本は自米同声  
明以降帝國主義の全アジア的動向が  
形成する政局裏話は次第に大き  
きく口を開かれていく。の組織の政

とて如何なる仕事も至めるのか。社繩の系譜社会の後について云ふと、復帰不許」という形で表明されてゐるが、日本を元にその方針性を明確に示してはいない。現在實行しているのは、東洋人に於ける石油公司ナードの建設である。米ナードは、ともかくて過疎社会によるし等々のことが言えるが、社繩労力は40万人であり、たゞ一そのうちナード人を本土にもつてきただとしての現状の勞功力不足からいって十年に亘りますので、日本は社繩技術を送り込む、輕化學工業を形成していくので、日本は、亞細亞の中心に「殖民地アシア」をもつておこなっているのだ。たゞ、ともに日本の基

早く、消費材生産に必要と下請方生

としつ手帳基盤をもつ。つまり出縫で

は軽工業の完成品を作るには出来

ないのである。確かにこのことの日本

にとって地理的意味する。地理

的条件の影響の位置から言っても

軍事体系の占める位置から言っても

地理的の極東となるべき出縫は發

出のためも頗る一品成品を多く出る

といふことであつた。だからてくろ

が「軍需生産」の建設である。日本

としての内燃の不稳定性に軍需生

産を請けきるにあつた。

と云ふことである。自從

以下請方業は軍の生産業を軸に出縫に

もくじまつてゐる。軍需生産、後備

軍事改組への轉換につきして、し

又周知のように、メトナム軍事ライン

が子全域の拡大に比例して、し

米軍の軍事的取扱い、出縫基地の強化

効率化とも見合つてしまつてゐる

のだ。次に鐵道出縫に於ける農民との

分離を基準にした勞働力の流動化を見

ておくと、農村解体は二十一年十月份

より始めて、軍事基地へ土地を賣り出

たところが始まった。その一部の農民

は、地労働者に吸収された。六年

では、以前と同じ米作村をもつてい

たが、それが六七年までに半分に減化

しや、砂糖キビ等の輸出商品生産

に移行し、行政的に米作村をもつてい

たが、これが六七年までに半分に減化

しや、砂糖キビ等の輸出商品生産

年齢上げでおつた。たゞれども、ま

たやがてとも言つて、このことが切

機にになると日本政府は声明し

アフリカの農業と日本

オーバルサウス生産が世界の農業へと進歩した。アーマー

日本ではそれが、今世界の政治的、経済的、社会的、文化的、技術的、文

政治的、経済的、社会的、文化的、技術的、文

てゐる。月度四ビニール裁縫への転

換が強制されようとしている。し

しやは大規模な資本力を必要とし

てゐる、農村は動搖しはじめて

この三度の農村分解を具體にして出

経済社会の流动的、半労働力商品化

を強要せり出ののだ。

（つづいて後進団の民族解放斗争は、帝

団の再生をねらうと奮闘に邁んでい

るのだ。またこの後進団解放斗争の世

界的影響として帝國主義が民族改革

令團として飛躍し迅疾する以外に自

己の使命を確立せんとするのが出来ない。

（つづいて帝國アジアの教

育に対する帝國化の再編成、先鋒的

帝國本位の再編成日本政治的強化

）が基盤に全般に亘り勢力擴張本位

の再編成した帝國立本位の運動化

が生じてゐる。

## 明大斗争の総括と方針

昨春4・12株動隊暴行・不当逮捕に端を発し、バリナードストライキまでに発展した明大闘争は、おりから全国津々浦々の学園において斗われていた全国学園斗争の實を継承し発展させるものとして存在してゐた。

日本帝國主義の不斷にくり返えされる資本の膨張と対外伸長は、帝國主義者達に対して新たな国内再編を迫っていた。それが専別大学においても不可避に存在していた。65年草太才二学生会館の管理運営・授業料値上げ反対斗争は、そいつた帝國主義者達の新たな海外反革命・侵略に見合つての国内再編成に對決する斗いとして存在していた。それは明うみに大学の存在・自己の存在を根底から向ひかえるものとして存在していた。

個別明大斗争はい、たゞどのよう

斗われたのみ。69年4月12日「法経校舍奪還・ロックアウト粉碎」を叫ぶ日本共斗に対する株動隊の規制、そして学館私入・無差別不當逮捕に抗議するという即目的・感性的反発をもつと同時に、おりから全国学園において斗われていた斗争の質とは、ブルジョワイデオロギーのもとでの「学生存在」を再度自己に向ひかえす作業が開始されていった。それは「大学とは何か」等に代表される向ひかけであり、より具体的に言うならば、眞理探求の場

として戦前戦後を通じて社会から隔離された場所にあると信じていた大學が、実は、体制を推持し、それを支えるための學問を教える場であり、その場を通じて体制イデオロギーを保持しあつた人間を產生していく基礎であつた事に対する定としてあつた。それは明らかに現在の世界构造を否応なしに問題にせざるをえないし、权力との対決を不可避免に迫つてゐた。明大斗争は、さういふ大貢をもつた斗争であった。60年代階級斗争の異なる発展を展望してゐた。であるが故に我々はこの明大斗争の根底的總括の中から70年代階級斗争の發展を勝ちとつていかなければならぬ。

明大斗争の事実経過だけだりたい次の五点に集約できる。まず4・12から、21全共斗結成大会に倒る過程(2)、21から8・3中教審答審リ大学立法が明文化される過程(3)、8・3から10・9の株動隊導入要請・全学ロックアウト策動、徹底抗戦に倒る過程(4)、10・9から10・21日産反戦デーリー、16メ佐藤訪米阻止南争に倒る過程(5)それ以降の斗いと現在の状況、新旧学館がこれまで解放されていず時間性ロックアウトの下鉄柵におあわれた学園へ通つてゐる。

以上の点を次に生田を中心詳細に見あつ。① 日大全共斗会談の500名による「ロックアウト体制粉碎」の集会とデモにあたり株動隊の規制にあつた学生が、本校学館に乱入し、本学

叛乱を社会紛糾へという過程は、秋の政治過程を前にしたところのブリショーディー達の拠点への機動隊動入、拠点圧殺の前に急速に政治過程へと吸いあげられ、それに對して我々は全共闘の軍國化、機動隊との先端攻防といった形でしか提起しえず圧倒的な機動隊の暴力とブルジョアジーからする「秩序が破壊か」という洞窟の前に敗北していった。それは全共闘運動が個別愛園の枠を突破しつつも、

過程たとえば、入管・沖縄・三里塚等の問題を持ち込む事により今までブレジショア政治委員会が設定していったスケシードル・何々決戦・何々決戦として表現できえなかつた運動の限界を突破していくかなければならぬ。現在的に我々にかかるところのロックマウト体制粉砕・農食解放・学長告示撤廃を勝ちひとつ。



農場実習期碎田筆の総括と方向性

アカウトは30回の1週間、四十回 農業を資本主義化發展過程から分離して田と鶴田地主がなされるので、どうやるのな? との及?

理の限界性をもつてゐる。といふべく、筆者によれば、この「アーティストの創造力」は、必ずしも「藝術的才能」の範疇に属するものである。筆者によれば、アーティストの創造力は、必ずしも「藝術的才能」の範疇に属するものである。

の、その結果の発現苗は、その行進の中断と退散を示さずたれど、

資本投下分を回収した後、活性化常に存在する。

以上二つの資本主義的發展の外的要因として、農業の機械化が一つついてゐる。この農業の機械化は、主として、生産の効率化を目的とするものであるが、その結果として、生産量の増加が実現され、これが、生産過剩の一因となる。また、生産過剩の一因となる。また、生産過剩の一因となる。

うとしてきた問題である。念れることは、たまに原因となる。

大部にわける専門（穀類栽培）と現実に付く農業問題が並んで、この二つのあいだの接觸點をもつて、その間にかかる關係は、必ずしも複雑である。

実践問題との少しの問題である。しかし実践過程から常に大学における学問の

の問題性を暴露されつつも尚、執拗に  
要望性を要求し、社員待遇ばかりを重視して、  
必要十分な労働条件を実現するためには、  
必ずしも専ら資本主導の「効率化」による  
効率化／簡略化／削減化によっては、

農業は如何なる位置に立つのであるか。それはかりと見て、一程の経済的意義をもつてゐる。

延田の農業資本主義の發展の、政治的、社会的、自給自足体として、外物の存在である。正に、農林共同体（コムニティ）も、能農業を

である。資本主義発生以前、封建時代の農業（封建期）一九一九年以内、若年労働者も都市（工場）に口々に入り、若年労働者も都市（工場）に口々に入り、

たかが原教説を採用する本邦の学者は、その多くが、この種の問題に對する知識を、日本では、まだ甚だ少く、その點で、日本の研究は、必ずしも世界の先端に立つてゐる。しかし、それが、必ずしも、日本が、世界の先端に立つてゐる証據ではない。

正業に切離し、正業を基盤にして、  
発達していった。何故農業を基盤に  
多くはつて、戦前の規模の聖済的復興  
もありうる、60年後をめぐつて帝國

この発達した文化の歴史、何故

『我々の実習粉体闘争はどういつた開いてあるのか』

矛盾があるか、さういは不斷の永遠

反大当の一視点

此ばならぬ。

我々が60年代後半より受けた田中博士の「階級斗争論」をもとに、争いの構造を理解する。田中博士は、階級斗争論をもとに、争いの構造を理解する。田中博士は、階級斗争論をもとに、争いの構造を理解する。

てや資本主義体制下における農業農民の問題をいかにして農業と結合したの發展の理論として展開している。柏氏の農學原論のは明大農學部の農民に対する裏切り行為であるし重大なる犯罪である。現在の農業と対置する中から農學を再度立ちえなしていくという姿勢が根本的に欠落している。農學榮えて農業滅ぶを裏面的に体現している。そうであるが故に大学での授業を実習で検討していく。現実過程への準備として実習があるといいつつも、現実を媒介とした位置づけが総体としてはないが故、無内容な実習へと転落していかざるえない。これは単なるカリキュラムの問題では決してない。闇にはそ

過程でのなければ実現しないし、うである以上我々の闘いはブルジョア吉田の本質的に形骸化していく間にあり、おしすすめると、従って組織化していく闘いを不斷に展開していかなければならぬ。実習紛糾闘争は、その質において普遍性を持ちつつも闘争形態としては個別的闘いとして終始していった。我々はその限界性を他大学農場部諸君との強固な連帯を充ちとり、同じ領域から我々の権力形成へと構築していくかなければならない。我々はすでに王大農場部諸君、和光大学三里塚闘争の諸君との統一組織形成を充ちとった（三大学三里塚共闘会議）その間にさらに他大学へと拡大していかねばならない。

暴力闘争として展開し抜いてきた。この「生産運動が血の結晶として提起してきた大資本根柢的破壊・解体は「暴れりの」の「暴力的暴力的」に付つて、その現実的戦略・技術といわば幻想の領域に並転し、「家解体の現実的展望を伴う」とよくして、大崩壊がかつての現実性とし、この改良思想から、非現実性としての思想活動に転化させられた。我々が思想体験としてしか想起しない時、明らかに思想を現実が拘束しない故に現実の運動反対にも大勢、解体論にかけはなれた地平における成長論へならざるを得ない。むしろ、我ども現実の運動展開が大崩壊解体論に対し、討伐するところの既成既定運動組織、イディオロギーの松太郎主の揚げ下りて、このまま、もはや

農学の限界性を大衆的に露呈していくものとして、たゞ我々は「教育労働者」助手と連帯し、自らの存在をかけて対決していった。数時間の論争の末、遂に彼等は論理の破綻をきたし、學友と我々の前に深く頭を下され自己批判していった。我々の闘いは一程の勝利をかちとった。しかしながら、まだ我々の前に農業の問題、ブルジョア農学は今尚歴然として存在してしまふ。予盾があるか？ 然り我々は不斷の

私どもは鬼更の運動展開が大塚解体論に對し、反対するところの既成既足運動組織、イディオロギーの松太郎生産の場にちりつあることをも知つてあがむけれども、言ひば大塚解体論が純化した思想の地平を獲得し、其現実性としての思想体験に過ぎなかつた時、鬼更翁に提起されてくる全ゆる事象が、いよいよ大塚解体路線に對決し、その向うで立たせるゆゑの反応としてしか存在しないふうな覺えをもつてゐる。

生女共運動が提起した仁としての主體の確立と、その主體を媒介とする自己否定の論理は仁の社會的規定性と歴史的責任と自己の不斷の対象化を通じてむさしく愈々運動体として、或後社会の轉換へ成る市民的価値意識の分解と、暴力(マイルド)の行使と、そしてソーシャルワーク的軸線をなし切る課程ひつきりし、或後体制との差別を爲していった。しかしながら我々は有故に今、この地平に在りおはなれないか? 仁的意識性においては自己が突破したサーキルにノ大夢に、高度に分子化された資本主義経済の文通形態における力の扇形を拒否いたばずの永続的な自己の削ぎ去れを割離する前に並びざるを得なかつた私我、まさしく権力斗争の時代に相即し知だぬければならないのか。

実展の問題を展開して、反大學。M. 文化M. 設計課では、二期工事で勝ちとつていいく  
なつかず。M. 段階から、一期の意志を内実化すべくして、このためには、火災の往來を勝ちとつていいくことだ。

方の内2名の撤退ベトナム特需の減少、在韓米軍が著す外貨の減少の政治的、經濟的軍事危機の進行のままで毎月の朴の金へと進行しざうとしている時、その危機の進行しそういる朝鮮に対する日帝の反革命介入をみこしての日本口内に於ける在日中・韓アジア人民に対する支配の先取りとしてある。オホ鬼は民族排外主義とした一面的イデオロギーの問題ではなく政局領域の問題でありアジア的リバールをもった領域の問題である。

一連の日韓商會会試・日韓協力會を経て来年の日韓地位協定に至る過程が明らかにしてゐる如く政局・経済・軍事に渡る全過程の中國は連絡体制と其行動一同反革命左アラビア的で然るが如きものとして存在してゐる。それをスムーズな形で補完するものとして人管法攻撃の半の意図が存在してゐる。このようは動向に対しても左翼紛争がどうな立場をとるのかが此の因題となるところである。

現在、人種法に付する主張としての  
被虐民族の立場に立つのを被虐民族  
族の立場に立つのをの思想が發展  
して、在日被虐民族の無条件  
防衛である。「被虐民族→被虐民族  
族」、「世界マルキ」「バーの側」、「江  
の川、吉野のコレターニーの側」  
に対する反対の立場で被虐民族  
としている。

面的統治となさんとしている。この事を見て明らかに加く、入墻云攻撃のヤード点は、□内に於ける反政府活動の禁止としてあり、朝鮮云連解体一華青年解体云類似とした最終的□内支配体制の決着としてある。

確かに我々の取る立場は被抑圧民族の側に立つといつてあらう。しかし被抑圧民族の無条件防衛として被抑圧民族の圖式を空破する民族形態をもつて抗争をしていなくていい換えをもつて、防衛争として組織されねばならない。ではければ、我々は戦闘的華麗開拓君の前に唯々尊を重ねて防衛せんばずる以外にはない。もともと、この防衛さんはうちもその揚振りのもので、あとは着實主義的流していき諸君もいるが、既に被抑圧民族の無条件防衛を設定せらるといつまでもたつておも被抑圧民族は被抑圧民族であり、又その遂でこそ結果を得ない。我々のもううり被抑圧・被抑圧の関係式の根源からの突破に単争のオペレクトを設定していふ。従つて在日中国人、朝鮮人、アラビア人民の側に帝日本至メーレンジアラーに押す開拓争として組織されなくてはならないし、日本人民に之つては、差別ご抑正を日本人民をして行なわせてきた日本帝日本主義に対する開拓して組織されなければならぬ。

### 43年度農学生会、会計報告

	43年7月	8月	9月	10月	11月	12月	44年1月	2月	3月	4月
総額金	59,580									
学生会費	12,000		50,000	19,000			18,500			
補正予算							↓			
小計	179,580			50,000	19,000		18,500			
交通費	6,500				8,000					
歩外費	480			1,025						
備品費				830						
合宿費		32,430								
消耗品費			35,550							
厚生費	3,000			1,2310	59,390		17,000	2,000		
講演費			6,000							
電話代	5850	9135	8327	2900		2084	6,200	11,400		10,853
小計	13830	9135	50,605	58,615	6,7390	2084	23,200	13,400	0	10,853
残高	165,750	156,615	10,6010	97,395	4,9005	46,921	23,721	28,821	28,821	17,968
収入合計				269,080	—					
支出合計				249,112	—					
残高				17,968	—					

### 44年度以降 45年11月30までの農学生会会計報告

#### I 収入の部

前回総額金	17,968	—
学生会費	1次 5月	60,000
	2次 6月	10,500
	3次 10月	50,000
	4次 2月	19,000
	補正第4月	100,000

収入合計 348,468.—

#### II 支出の部

	44年5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	45年1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	
交通費						300	520			1,245	1,148			9,100	3,000						
備品費							6710														
合宿費														15,000							
消耗品費	60,878	350	27,400	12,75		2,140	3,130			33,70	34,800	18,400	17,20								
厚生費	15,900				2,000	1,000	1,000					5,900									
講演費												19,000								18,000	
通信・電話	900			20,700	24,622	5,500															
小計	900	126,778	350	27,400	21,975	26,622	8,940	11,360			55,95	35,748	28,740	17,20	24,00	3,000	19,500	0			

支出合計 340,028.—

残高 8,440.—

以上 農学部学生会会計局